希望

第 115 号

発行所
〒860-8558 熊本市中央区内坪井町4番8号
熊本中央高等学校
後援会（保護者会）広報委員会
TEL 096(354)2333
FAX 096(356)6279
印刷　かもめ印刷 279-3440

# 看護学科 第14回 10月28日(土) 戴帽式

## 戴帽式を終えて

二年八組　河端梨々花

私は戴帽式を終えて感じたことがあります。それは一人ひとりの責任が今まで以上に重くなったということです。

私は、戴帽式を終えた今、ナースキャップをかぶるということの責任の重さを、これまで以上に感じています。ナースキャップを戴いたということは実習に行くことが許され、患者様からは、私たちは一人の看護師として見られるということです。自分の知識を使って患者様と接さなければならないし、そこに責任が生まれると思います。自分の知識が浅いと患者様への看護が中途半端になり、信頼も築けないので、実習に行くまでの残りわずかな時間を無駄にせず、さらに勉強に励み、責任から逃れることがないようにしたいです。

また、私は戴帽式の中で戴帽生代表として戴帽の辞を読みました。自分が看護師になりたいと思った経緯や、これからの行動について全員に知ってもらうことができました。緊張しましたが、私一人の気持ちだけでなく、戴帽生全員が思っていることも言うことができたと思います。誓ったからには互いに協力し合い、同じ目標に向けてこれからの実習を学びの多い、充実したものにしたいです。

これから先、辛いことが多くなるかもしれません。しかし、それを乗り越えればきっと「ありがとう」と言って頂ける看護ができると思います。そのような言葉を言って頂ける看護ができるように、日々の努力を惜しまず頑張っていきたいです。また、戴帽式で感じた責任の重さを忘れず、今後の看護学生生活を大切にしていきたいです。

二年九組　前田初姫

去年、先輩方の戴帽式を見て感動したのと同時に一年後には自分も、ああいう風になれるのかと不安になったのを今でも覚えています。戴帽式は試験に合格しないと出ることができないので、戴帽式は高校に入学してからの一つの目標でもありました。二年になり八月には実技テスト、夏休みが終わってすぐには筆記のテストを受け無事に合格できたときは安心し、戴帽式に向け気が引き締まるような思いでした。戴帽式当日、白衣を着ると実感が湧き一気に緊張しました。実際に先生からナースキャップを被せて頂いたときは本当に嬉しかったです。看護学生になり一年半、覚えなければならないことも、色々な出来事も山のようにあります。でもナースキャップを頂いたときの嬉しかった気持ちはこの先ずっと覚えていると思います。戴帽式も無事に終え、いよいよ実習まで残りわずかとなり、着々と十二月の実習に向けて準備をしています。初めてのことばかりで戸惑うことも多くありますが、戴帽式を迎えたときの気持ちを忘れることなく、これからもっと成長できるよう一生懸命頑張っていきます。

二年十組　林田愛蘭

私は、技術のベッドメーキングが苦手で何度も三角や枕カバーをつけるのを練習しました。筆記では、夏休み八月中旬の部活が一段落着いて、熱心に勉強を頑張りました。ナースキャップを頂いてステージに立っている時に改めて看護師になるためにここに来たのだと確信しました。それと同時にやっと憧れていたナースキャップと白衣を着れている喜びでいっぱいでした。

戴帽式の時、たくさんのお祝いの言葉を頂きましたが、朝日野総合病院の看護部長さんからの式辞を聞いて病院で指導される方の優しさを感じ少し実習に対しての不安がなくなりました。声をそろえて、ナイチンゲール誓詞を言うのは、初めの頃は覚えるのもなかなか大変で間の取り方がバラバラだったけど、本番ではしっかり合わせることができて目指すものが同じ仲間と一つになれた気がしました。

一年生から、高校に入って初めて看護の専門教科を学習しとても難しく、技術面においても覚えるのは大変で自分が想像していたものよりはるかにきつかったです。でも、戴帽式でこれまでやってきたことの達成感や自信を持つことができました。戴帽式は、ただナースキャップ、キャンドルサービスをするという式ではなく、これまでの自分たちの頑張りを評価し、これから実習という大きな目標に向けて仲間と共に協力し合うことの重要さを考える式だと思いました。

戴帽式という伝統ある式に出ることができ本当に嬉しかったです。実習に出てつらいこともあるかもしれませんが、この時感じた事、考えた事を思い出して頑張っていこうと思います。

われは心より医師を助け、
わが手に託（たく）されたる人々の
幸（さち）のために身を捧げん。
ナイチンゲール誓詞（抜粋）

## 戴帽式によせて

看護科主任　松岡由希

第五十回という大きな節目に戴帽式を迎えた十五期生。入学早々熊本地震に見舞われ、看護を学ぶことへの動機づけもできないまま休校となった。その時の思いを綴った生徒の手記（益城中学校出身）を、本人の許可を得、一部抜粋し紹介する。

「避難所で、怪我をしている人々を目の前に見て『何か自分に出来ることはないか』とずっと考えていたときに、看護師の女性二人が立ち上がり、懸命な手当をしていた。その場面を見て感動し、『看護師になりたい』と強く思った。その後の避難所生活で、自分の事よりも人のことを考えられるようになり、毎日ボランティアに参加した。（中略）皆で力を合わせることの大切さも学んだ」

この危機的体験の中で、看護師の姿が、純粋な心に強烈に刻まれ、看護への興味を引き出すことにつながり、動機づけとなったようだ。少なからず生徒たちはこのような体験をした。「看護師国家試験に合格してはじめて看護師としての第一歩を踏み出すのですよ」とは、この世界での常套句である。生徒たちが興味関心を失わないように、この災害で得た貴重な体験を無駄にしないようにサポートしていく責任を切に感じる。同時に、これから臨地実習を体験するなかで、「夢」が現実の「目標」へと変換され、具体的な行動目標へと結びつく大切な瞬間に立ちあえる喜びも感じることができる。

戴帽式に参列いただいた看護部長、看護師長の方々から、「皆さんの誓いの言葉が新鮮で心を打たれた」「ナイチンゲール誓詞を唱える生徒たちを見ていたら感動し、思わず涙がこぼれた」など伺った。

十五期生は、人を感動させる力を持っていると確信する。今の純粋で迷いのない心を持ち続け大きく育って欲しいと願う。

## 部活動報告

**陸上競技部**

- 山形インターハイ
  - 女子　三段跳　**6位**　野田永里愛（力合中出身）
  - 女子　走高跳　**7位**　茂田　真由（菊池北中出身）
- 愛媛国体
  - 少年A男子走幅跳　**5位**　日髙　修杜（帯山中出身）

**コーラス部**

- 第70回全日本合唱コンクール全国大会
  - choeur cinq（クールサンク）
  - **銅賞**　7名参加（5団体中）

〔県内5校（八代高・中、済々黌、鹿本、熊本学園大学付属）で結成した合同合唱団（choeur cinq）（五つの合唱団という意味）で出場しました。高校Bパート（33名以上）に合同合唱が出場するのは初めてということもあり、合唱界で話題となりました。〕

## 新校舎落成記念祝賀会

10月1日(日)ホテル日航熊本にて新校舎記念祝賀会が開催され、理事長をはじめ設立に携わった方々、旧職員、先生方、PTA関係等が参加しました。

熊本中央高等学校 新校舎落成記念祝賀会

---

# 2年生修学旅行

10月17日(火)～20日(金)

## 修学旅行の思い出

2年4組　緒方華乃

待ちに待った修学旅行。バスの席はとても仲の良い友達と隣同士だったので、凄く楽しみでした。福岡からは人生で初めての新幹線に乗り、三人掛けの座席を向かい合う形にして六人でトランプや色々な話をして盛り上がり、普段あまり喋らない人とも仲良くなる事が出来ました。静岡に着いたらそのまま白糸の滝に行きました。霧がかかっていて滝をはっきりと見る事は出来ませんでしたが、音や水しぶきなどで迫力は十分に伝わってきました。最後の旅館では大浴場で初日の疲れを癒すことが出来ました。

二日目は最初に富士山の五合目に行きました。五合目の景色は頂上でもないのにとても綺麗で感動的でした。そしておそらく日本で一番高い所でソフトクリームを食べるという貴重な体験ができて嬉しかったです。横浜中華街には私の大好きなパンダが沢山いたので大興奮でした。スカイツリーの展望台からの景色はどこを見渡しても街の灯りが続いており、やっぱり都会だなと思うような景色でした。ソラマチでの思い出は集合時間に間にわせるために班のみんなでエスカレーターを全力で駆け下りた事です。とても楽しくて、長い一日でした。

三日目はディズニーシーに行きました。せっかくのディズニーなのに雨だったことがとても残念でしたが、晴れている時には見れないディズニーが見れましたし、とても可愛いディズニー限定のアイスを二個も食べれたので良かったです。やはりディズニーは夢の国だなぁと思いました。

最終日は浅草に行きました。メロンパンアイスとお団子を食べ、おみくじを引き大吉を当てる事が出来たので、最後まで興奮しっぱなしでした。

羽田空港に着いた時、みんなともう泊まったりすることはないんだと凄く悲しくなりましたが、みんなと一生に一度の修学旅行で最高の思い出を作る事が出来たので本当に良かったです。

Thanks!
TOKYO SKYTREE 5th
2017
10/18

## 修学旅行を終えて

二年学年主任　竹原一輝

今年の修学旅行は、十月十七日から二十日までの三泊四日の日程で実施されました。初日は本校をバスで出発し博多駅まで移動でしたが、皆元気いっぱいでこれから始まる修学旅行への期待感がバスの中の様子からもうかがえました。新幹線で博多から静岡まで行き、白糸の滝に向かったのですが、滝に近づくにつれて霧が濃くなり、到着した時にはほとんど先が見えない状態で、残念ながらうっすら見える滝と流れる音しか聞くことができませんでした。

二日目は富士山五合目まで登りましたが、現地の人も驚くぐらいの久しぶりの快晴で、富士山もくっきりと見えていました。お昼は横浜中華街に移動、肉まんなどのおいしいものをほおばっていました。その後スカイツリーに移動し、東京の夜景を見ながら、その下のソラマチにて夕食や買い物を楽しみました。

三日目は生徒たちが一番楽しみにしていたディズニーリゾートでの散策でした。朝からの雨と三十六年ぶりの大寒波で生徒の体調を心配しましたが、早めに帰ってきた班は少なく、多くの班は朝九時から夜八時まで目いっぱい楽しんでいました。

いよいよ最終日となり、浅草寺でクラス写真を撮影した後、自由散策。テレビでよく見る仲見世通りでお土産を買う姿が見られました。初日は元気いっぱいだった生徒たちも、連日の睡眠不足と旅の疲れで最終日にはぐったりした様子。帰りの飛行機では生徒も私たち教員もしっかり睡眠をとりました。

出発するまでは長いと思っていた修学旅行も、終わってみればあっという間の四日間でした。途中、体調不良を訴える生徒もいましたが、それほど大きな心配もなく、また服装などで注意される者もいましたが、集合時間などはきちんと守ってくれたため大幅な時間の遅れもなく、ほぼ予定通りに日程を消化することができました。学年全員で寝食を共にすることはなかなかできない体験で、それらを通して生徒同士の結びつきが強くなればいいなと考える旅行でした。

* * *

## 片白育子が遺したもの

～追悼に替えて～

片白先生が亡くなられた。自分にとって片白育子はどんな時にも真正面から本気で叱ってくれる唯一の先輩だった。そんな人がもういない…そう思うとどうしようもなく寂しくて涙があふれる。通夜のときも、そんな恥ずかしい姿を誰にも見せたくなかったので、鬼塚先生にお願いして遅くに車で連れて行ってもらった。天草までの長い時間、馬鹿な話や愚痴をたくさん聞いてもらって少しは気がまぎれたが、写真で微笑む先生の顔を見ていると、また抑えられない感情でいっぱいになり、涙が止まらなかった。あれから一か月余りがたって、やっと悲しみも落ち着いた頃、ふと思った。このまま片白育子を思い出の中の人にしてはいけない、と。片白育子が熊本中央高校の教師として遺したものをしっかり伝えないといけない、と。

片白育子はいい意味でも悪い意味でも「挑戦」の人だった。どんなときにも、どんな生徒にも要領よくやる、うまくやるという態度は絶対にとらなかった。生前、事実上の最後の仕事となった学年主任。その学年で普通科の担任をさせてもらったとき、あらためてそのことを痛感した。生徒たちのタイプはいろいろだったが、一言で言うと荒れた生徒が多い学年だった。正直、学校という枠に入れない、いや、それを認めようとしない生徒がけっこうな数いた。そんな生徒たちに片白育子はどうしたのか？うまく懐柔しようとか、わかってあげようとか、理解してやろうという姿勢は0だった。ほんとうにほんとうに0だった。あくまで校則を守りなさい。授業をちゃんと受けなさい。遅刻欠席はするな。制服をきちんとしなさい等々…いいことと悪いことをまっすぐに伝え続けた。どんな場所でも、どんな時でも、誰に対しても同じように、同じことを繰り返し繰り返し訴え続けた。もうすでに病魔と闘っていた片白育子のその姿は、悲しいぐらいにひたむきだった。でも、なぜか輝いて見えた。職員室で二人になったとき「先生、もう少しうまくやりませんか？」という自分に、「うまくできんもん」と一言で返した片白育子。タバコ、中抜け、暴言、深夜徘徊等々…毎日のように問題の起こる日々、自分もいつの間にか、うまくやろうとか囲い込もうなんて姿勢を捨てていた。片白育子のように、思ったことをまっすぐに、いい悪いをはっきりと生徒たちにぶつけていこうと覚悟を決めた。もし、今の自分に「熱さ」というものがあるとしたら、こういった片白育子のまっすぐで不器用なぐらい純粋な「熱さ」を間近で見、感じてその影響を受けてきたからかもしれない。

片白育子は、けっしてうまい教師ではなかった。「技術」を持っている教師でもなかった。担任をしても、クラブ顧問をやっても、つねに不器用なぐらいまっすぐな「挑戦」の人だった。そんな片白育子のクラスが、一度だけ合唱コンクールの本選に出場したことがある。そもそも片白育子は合唱の指導なんてできないし、うまく乗せようとか、やる気を出させようなんてテクニカルなこともしない。「本選残ったよ。」と苦笑いの片白育子。どうしても喜びを隠せない照れくさそうな笑顔が忘れられない。片白育子のクラスが歌った曲。それは、いきものがたりの「エール」。♪さよならは別れの言葉じゃなくてそれぞれの夢へと僕らをつなぐエール♪学年主任のときもこの曲が大好きだった。出来田先生のクラスの合唱にうっすらと涙を浮かべて感動する片白育子の姿…職場ではそんな浪花節的な姿は決して見せず、つねに使命感に燃えて「挑戦」をし続けていた片白育子。病気と闘いながら…そんなことを考えていると、今、自分も含めて、どこか教師の仕事を要領よく、うまくやろうとする風潮があり過ぎるのではないかと思ってしまう。よく言えばスマートに、悪く言えばクールに…片白育子のことを思うとき、先生が遺してきたものを思うとき、ほんとうにそれでいいのか？片白育子には、教育が「技術」だなんていう発想はなかった。とにかく自分の本気の姿勢を、生徒たちにまっすぐにぶつけていく。それがあくまで先生の「挑戦」だった。今思う。自分の中から消えそうになっていくひたむきさや、本気の姿勢…うまくやることでごまかそうとする自分…教師は「熱く」なければならない。たとえどんな壁があろうとまっすぐで、ひたむきでなければならない…たったこれだけのことだけれど、片白育子は自分の教師としての生きざまを通して、そのことをわれわれに遺してくれたのではないだろうか。

通夜の晩、二十年前の卒業生に会った。みんな当時の問題児で片白育子のクラス。その当時、冨田先生、古澤先生、そして片白育子と商業科の担任をしていた。はじめての担任で、力がなくてつらい毎日だったけれど、その頃のほんわかとした楽しさが懐かしく思い出される。「先生、いくつになった？」と問題児だったママが聞く、もう三十五も過ぎて娘を連れて来ている卒業生。「わたし片白先生のクラスだったけん卒業できたと思う。だから、娘も来年中央に入学させたいと…先生、よろしくお願いします。」年々歳々人同じからず。人はあまたの時を超え成長していく。自分の思いをわが子にたくそうとする昔の問題児たち。「入学させなっせ、今の中央は絶対いいけん」この話を天国の片白育子はどんな思いで聞いたのだろう。

片白先生、先生の「挑戦」は長い風雪に耐え、時代を超え、時を紡ぎ、たくさんの「思い」のバトンに支えられて、ちゃんと問題児たちの心に届いていますよ。そして、来年入学してくるであろうこの卒業生たちの娘に、問題児だったこの生徒たちの娘に、自分が必ず片白育子のスピリットとその「熱さ」を伝えます。見ていてください。先生、ほんとうにお疲れさまでした。正直、自分も歳をとったなあと思います。気が付くといつの間にか背負うものが大きくなって、そんな不安や戸惑いを先生に相談したかったです。そして叱ってもらいたかったです。でも、そんな甘えはダメですね。先生、期待していてください。遺された者たちで、どこにもない、日々「挑戦」し続ける熊本中央高校を必ず創っていきます。

bon voyage　先生のご冥福を心からお祈りいたします。

**（文責　塩田）**